特15
77

曹洞宗
授戒會

戒弟の心得

221
902

019701-000-2

特15-77

曹洞宗授戒会戒弟の心得

来馬　琢道／編

M38. 10

ABG-0498

目次

巻頭

●授戒会必要諸語

(一)懺悔の文　(二)三歸戒
(三)三聚淨戒　(四)十重禁戒
(五)禮拜の語　(六)飯臺の經
(七)懺悔の語　(八)受戒の語

本文

(一)緒言

(二)一般の心得

一、入戒到着　二、携帶品
三、戒名　四、正戒代戒亡戒
五、座席のこと　六、荷物の處分
七、三師のこと　八、戒弟の心得
九、授戒の役々　十、施餓鬼、大般若
十一、供養のこと　十二、因縁血脈のこと

(三)日々の行事

●初日

一、禮拜　二、禮佛
三、供養の お經　四、飯臺
五、生飯　六、茶碗、掬の始末
七、說戒　八、施餓鬼等
九、藥石　十、聖上禮佛祖禮
十一、說教開枕　十二、夜座
十三、點檢

●第二日

一、曉天の坐禪朝課　二、順列　三、相見の拜

●第三日

●第四日(中日)

戒金容納

●第五日

一、懺悔　二、捨身

●第六日

一、致語　二、滿散歎佛
三、滿散施餓鬼　四、敎授戒文
五、見道場濯頂　六、登壇　七、血脈授與

●七日

一、謝拜　二、上堂
三、門送　四、歸宅

(四)結言

授戒會中には必要なる法語

●懺悔の文

我昔所造諸惡業　皆由無始貪瞋痴　從身口意
之所生　一切我今皆懺悔

●三歸戒

南無歸依佛　南無歸依法　南無歸依僧　歸
依佛無上尊　歸依法離塵尊　歸依僧和合尊　歸
依佛竟　歸依法竟　歸依僧竟

●三聚淨戒

第一攝律儀戒　第二攝善法戒　第三攝衆生戒

●十重禁戒

第一不殺生戒　第二不偸盜戒　第三不邪婬戒
第四不妄語戒　第五不酤酒戒　第六不說過戒
第七不自讚毀他戒　第八不慳法財戒　第九不
瞋恚戒　第十不謗三寶戒

是等は、凡て戒師樣の說戒や、又は說教師樣の說教のある時並に敎授師樣の敎授戒文等のある時などに、唱ふべきものでありますから、是非覺えて居なければなりませぬ、

●禮拜の時に唱ふる語

南無三世諸佛(一たび唱へて、治度禮拜する)

●飯臺の時に讀む經文

第一　開鉢の文(お椀を開ける時の唱へ言)

佛生迦毘羅　成道摩訶陀　說法波羅奈
入滅拘絺羅　如來應量器　我今得敷展
願共一切衆　等三輪空寂

此間にて維那の方が疏を讀まれます、樋が鳴つたら次のをお始めなさい、

第二、十佛名

治度(禮拜)
明38
内

清淨法身毘盧舍那佛　圓滿報身盧舍那佛
千百化身釋迦牟尼佛　當來下生彌勒尊佛
十方三世一切諸佛　大乘妙法蓮華經
大聖文殊師利菩薩　大乘普賢菩薩
大悲觀世音菩薩　諸尊菩薩摩訶薩
摩訶般若波羅蜜

第三、施食の偈（之は維那和尚が一人て唱へらるゝだけて戒弟は聞いておる）

（朝）粥有十利、饒益安人、果報無邊、究竟常樂

（晝）三德六味、施佛及僧、法界有情、普同供養

第四、五觀の偈

一には功の多少を計り彼の來處を量る
二には己が德行の全缺を忖つて供に應ず
三には心を防ぎ過を離るゝとは貪等を宗とす
四に正に良藥を事とするは形枯を療せんが爲也
五には成道の爲の故に今此の食を受く、

第五、生飯を取る時の文（此時生飯を取りて膳の前の方へ出す）

汝等鬼神衆、我今施汝供、此食遍十方、一切鬼神共、

（此時御飯の椀を擎げて、一心に念ずると）

上分三寶、中分四恩、下及六道皆同供養一口爲斷一切惡、二口爲修一切善、三口爲度諸衆生、皆共成佛道

（供養の施主ある時は、直壇より、其報告ありて後殿鐘一つ鳴る、それより喫べ始めらるゝのてある）

第七、お椀を洗ひし水を捨てる時の文

我此洗鉢水　如轉甘露味　施與鬼神衆　悉令得飽滿　兜曰唵摩休羅細娑婆訶

第八、（こは維那和尚一人にて唱へる文なれば戒弟は唱べからず）

處世界如虛空、如蓮華不著水、心淸淨超於彼、稽首禮無上尊、

●懺悔の時に唱ふる語

少罪無量（又は障罪無量）

●受戒の時に唱ふる語

戒師樣が能く持つや否や　と云はれたならば、能く持つと明らかに唱ふべし、

自序

本書を編むにあたり授戒に精通せる某老師の指導を得たること少からず、然れども戒師の家風の異なるもの多く、殆んど統一に困しみたるを以て、諸般の慣例を併記したる爲め老師の芳名をこゝに掲ぐるを憚かり、單に余の謝意を表するのみ、

且、本書は眞に戒弟に對する參考書のみ、決して法中の士の用に供せんとにはあらず解說あまりに俗に失して往々其眞を失ふものあらん、願くは有識の士之を諒せよ、

曹洞宗授戒會 戒弟の心得

緒言

我宗には授戒會と云ふ重い大法要があつて何國の地方でも行はれてをります、之は佛樣から傳はつた戒法を授ける儀式のとて、中々粗畧にならぬ法要で、且つ又、其催しには大層な準備のかゝるものであるから、容易に行ふとの出來ぬものである、多い檀信徒の中には、一生に五十返も六十返も授戒についた方（授戒會に入戒することを、俗に授戒につくと云ふ）もあるさうぢやが、其樣云ふ人等は、實に因緣のよい人で、其も土地柄が餘程宜しくないと、其志はありながら、入戒するとが出來ないで、殘念がる人もあります、何にしろ、世は無常のもので、因緣が惡ければ、家の都合や、身の都合で入戒の出來ぬともあります、から、都合の出來る時に、思ひ切つて入戒るゝが宜しい、併し、何遍授戒についても、佛戒とは何樣なとか解らず、血脉とは、何樣なものか解らずに居る方も少くないで、斯くては、折角、佛樣に因緣を結び、貴き戒師樣や、教授師樣や、引請師樣を煩はしながら、下世話に云ふ佛造つて魂入れずと云ふやうなとでありますから、それを遺憾に思ひ、簡單と、戒弟の心掛けとなることを之からお話しておかうと思ふのであります、尤も、私が申すとも、地方により戒師樣によつては、少しは違ふともありませうが、其れは、宜しき樣に見計らつて、凡て指揮をなさる方の辭に從は

ねばなりませぬ、私は斯樣云ふ書籍を見て、斯う心得て居るから、それでは違ひますなどゝ言張られては、却つて、私の迷惑であります

第一、一般の心得

一、入戒、到着

授戒につかうと思ふ者は、前以て菩提寺の手を經るなり、又は、直接に其寺院へ申込むなりせらるゝのであるが、若し其暇のない時には、初まる日に直に往かれても、大抵差支はありませぬ、さて初る日には、午前中に、其寺院へ到着するやうに出掛けて往ので、可成早い方が宜しい、若又、親戚や知己とか云ふ人と、一所に入戒うとせらるゝ方は、其時から同道に行かるゝが萬事につけて都合が宜しいのであります、

二、携帶品

大抵、前以て注意のあるとであります、戒會に行くには、七日間は、まづお寺院に泊る積りで行くのである、中には、身躰の鹽梅とか、家の都合とかで、何うしても泊れぬ方もありませぬから、其う云ふ方は別として、普通の戒弟は、泊まる仕度をして往かねばなりませぬ、されば、

夜具蒲團枕、茶碗、珠數同袋、椀、箸、小楊枝、楊枝、歯磨、石鹸、櫛、鏡、はがき、耳掻、毛拔、

位のものは、持參なさるが宜しい、其他、名刺、手帳鉛筆等の品や、香水とか、寶丹、ゼム等の持藥のやうなものは、都合で持參するが宜しい、何にせよ、多人數の中ゆゑ、多數の品を持ち往かるゝは却つて不便であるが、さりとて、手廻りのものは無くても困りまするし、且又、多勢の中ゆゑ一寸氣持の惡いとか、不潔なとかの起らぬにも限らぬから、少しは用意せらるゝが宜しいと思ひます

三、戒名

一度、授戒につけば、必ず戒師樣から血脉に戒名をつけて下るとであるから、此次に入戒する時には、是非それを寺院に持參して、帳塲へ申出るが宜しい、また入戒したとのない方でも、逆修と云つて、既戒名の貰てある方は、其を紙に書いて、帳塲へお持ちになれば、帳塲では、直にそれを帳面につけますが、若し其時に申出でがないと、又後で、戒名を一つ貰ふとになり、一人で戒名が二つも三つも出來て、自身が困るばかりでない、佛法を輕んずるとになりますから、之は意を注けて貰はねばなりませぬ、

全躰、入戒する方は、出來るとなら、半紙二つ切り位の紙に、

市　區
何縣何郡何町村　何丁目何番地
○○院○○○○居士　○○○○
同人妻　生年月日何歳
○○院○○○○大姉　○○○○
生年月何　歳
（戒名なき者は戒名無しと書くをよしとす

と、斯樣に書いて、帳塲へ出されるが宜しいさすれば、字の書き違ひなどがなくて、誠に手數のかゝらぬ安全なものと思ひますが、戒

名の字が讀めぬとか書き難いとか云ふ時には其のまゝ帳場へお持ちになつてもよろしい、

四、正戒、代戒、亡戒

授戒に入戒ますのに、正戒と云ふのは、自身が七日間とも勤めて、自身て、登壇をすると云ふとてあります、又、代戒と云ふのは、自身て來られぬから、中日位にはお參詣に行きますが、迚も七日間はつとめられぬから、僧侶の方て代理をして、血脉をお受けおき下さいと云ふのてある、此際には、血脉を受けたら、何處へ届けるかと云ふとをよく、申込んておいて下さい、亡戒と云ふのは、因縁がなくて、此授戒に會はずに死んだ人の爲に血脉を受けてやると云ふとて、之も血脉の届け先を申込んておかぬと困ります

五、座席のと

戒弟の席は、前云ふ通り、荷物も少なきと故、別に間取りも要らず、また何寺でも、左程廣い譯には行きませぬから、本堂の中に適當な處を自分の席と定めても宜しいが、併し、一般の戒弟が同じやうに、何百人と云ふほど來る故、決して自儘なとをしてはなりませぬ、況して、佛法の大切な法要を行はるゝ、其の儀式に列なる一人ゆゑ、平素の身分は兎も角授戒會に受戒する信者の一人てあると思つて深く自ら戒めねばなりませぬ、さて、戒弟の席は、大抵左の通りに定らるゝものてあります

優婆夷		
須彌壇	内陣	
	本堂	
	迎拜玄關	
比丘尼 優婆塞		

本尊樣の在す處を須彌壇と云ひ、其周圍りは内陣と云ふ、

授戒會には四衆と申して、左の通りの人が揃ふべきものてあります、

一、比丘（男の僧侶）二、比丘尼（尼のと）

三、優婆塞（在家の男の信徒）四、優婆夷（在家の女の信徒）

比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四つの名は、皆な印度の語を支那の字に書いたものてあります、それ故俗家の戒弟ならば、男は優婆塞の處、女は優婆夷の處（大抵札が貼つてあります）に席を取れば宜しい

六、荷物の處分方

蒲團や夜具は、臥具係と云ふ役の僧侶に預け、また少し大きい荷物、例へば、着替へとか、寒さ防ぎの羽織とか云ふものは一包みにして、荷物係の僧侶に預け、手廻りの道具などは、合財袋に入れるなり、風呂敷に包むなりして、座敷の四方に（大抵は竹を釣つて、下げるやうになつてをります）置場があるから、其處へおかけなさるが宜しい併し大切なものは、自身に持つてゐないと、説教其他の時に氣掛りになりますが、可成ならば、金錢の外の大切なものなどは、あまり持つて行かれぬ方が安心だらうと思ひます、

中には、惡意な僧侶などがあつて、其方に預ける人もあります、それは、都合て宜しいが、それもあまり數があつては當人も困りませうから、其邊もよく考へてなさるが宜しい、

七、三師のと

授戒會には、戒師樣が戒法を授けて下さる方て教授師樣と云ふのは、戒法を教授し、且、戒師樣の補佐をなさるお方て、引請師（又

は、印證師）と可しますのは、戒師樣教授師樣の補佐をする方で、大抵之は、其寺の御住持が勸められ、又、戒師、教授師の二師は、宗門の法により、德望高く、品行の高い方を御招待するとであるから、戒弟は其のつもりで、三師ともに敬ねばなりませぬ、（但し其寺の住持が自身で戒師をなさるともあります）

八、戒弟の平素心得べきこと

一、毎朝鈴の鳴るを聞いて、徐に起き、夜は鈴の鳴るを聞いて徐に寢むこと、

二、寢床の中にて他人と談話し、又は烟草を喫み、菓子など食べぬやう

三、洗面所又は便所などにて他人と先を爭ふ如きことなきやう

四、足音高く歩かぬやう、大聲にて談笑せぬやう

五、說教の時は、說教師の机の傍まで遠慮なく進みて可成後の人にも聞取り善きやうにすべし、

六、法要の時は本堂の中へ入らぬやう

七、說教中又は讀經中に、他人と話などせぬやう、烟草など喫まぬやう、欠伸などは勿論のこと

八、己むを得ぬ用事の外は、外へ出ぬやう

九、子供など連れて參詣の折、若し泣き出す等のとあらば、速に外へ連れ行きて、說教讀經等に心を傾け居る他の信者へ邪魔をせぬやう

十、役々の室所などへ出入りして、事務の邪魔をせぬやう

十一、酒など飲まぬやう、飯臺へ他の食物を持ち出ぬやう、猥りに間食などを、他人に勸ぬやう

十二、あまり華美な服裝を着て、他人に誇る如きことなきやう

十三、坐る時に毛布など大きく擴げて、他人に迷惑をかけ、また寢床を態と廣く敷くなど、我儘の振舞のなきやう、

十四、席順に我儘を唱へて、係りの方に迷惑をかけぬやう、又、僧侶方は忙しき中にて種々の仕事をすることゆゑ、少しの手落もなきとは限らず、其時には穩かに注意すべきこと、殊に給仕などは、尤も此注意あるべし

十五、病氣等の時は、遠慮なく係りの者に申出てらるゝやう、若し強ひて法要に列なり卒倒するやうのとありては戒弟一同の迷惑となるべし

十六、禮拜其他戒弟一同にて唱る文句は、決して調子外れの大聲を擧げて唱へ又は讀むべからず、中音にて、何人にて唱へても恰も一人にて唱ふるやうに調子を合はすこと

九、授戒會中の役々

授戒會には、何う云ふ方々が、事務を執らるゝかと云ふに、其役はザット左の通りであります、

●直壇寮　授戒會の事務一切は此直壇の方が背負つて立たるゝとてあるから、何かにつけての相談其他は凡て、此寮に行くのである、此寮には直壇、補壇（直壇の補佐）の外に知庫、直寮、直行等の役があります

●化主寮　供養其他凡て戒弟や來賓の應接等に關係ある係りて、供養の施主の饗應など

は此係りてある、之には接客化行などの役がついてをります、

●荷物、臥具係　之は一番必要の役ですから、札を見て、其處へお預けになるがよろしい

●知殿寮　之は本堂のとを一切する係りて、殿行などが此寮に居ります

●維那寮（又は僧堂）維那と云ふは、俗に云ふ、お經を始める方で、此方は、澤山の僧侶を預かる役です、此寮には、維那、副悅（補佐）の外、堂司、送供、油頭、淨頭、水看など居ります

●典座寮　之は臺所であります、何百人の膳部を拵へる典座寮の忙しさは、見るから驚くばかりです、此處には飯頭、菜頭、看糧其他の役があります、

●浴司　之は入湯のとを取扱ふ方ですから、戒弟の方は、よく顔を覺えて居らるゝが宜しい

●室侍寮　之は血脈を拵へる所で、之も隨分忙しい役であります、此處には室侍の外に、補室、室行等が居ります

此外三師には、皆、侍者、侍香、行者がつき其他茶頭があり、水頭があり、役を數へれば、一つの授戒會には百人以上の僧侶は是非なくてはなりませぬ、

且又、此等の方々が、戒弟の御飯の時には給仕をせられ、其給仕の中にも、座見とて、見廻る役がありますから、中々容易なことてはありませぬ、

十、大施餓鬼、大般若の申込

大施餓鬼と云ふのは、曹洞宗の檀徒の方は御存知の筈である餓鬼に施す功德によつて、

各家の先祖代々に回向するので其を授戒中に時々行ひますから、其時に、自分の家の代々の戒名、又は志す亡靈の戒名を讀んで回向して貰のてある、又は一家で一度大施餓鬼を擧げて貰ふのもある、之は大施餓鬼係の處へ申込まるゝがよろしい、又大般若即ち御祈禱、之も時々行ひますから其中に名を讀み込んて貰ひたき方は申込まるゝが宜しい、若又一座別に擧げて貰ひたき方は、之も、其係りと御相談なさるが宜しい、

十一、供養のと

供養と云ふのは、授戒會に來た方々殘らずに、御飯を振舞ひ、其功德を先祖代々は勿論、子孫にも手向けるとて、毎朝、毎晝、毎晩、戒弟の多寡によつて、化主や直壇の方と御相談なさるが宜しい、其お施主には、其御飯の前に、戒師樣が御燒香て、讀經し、丁寧に、法要を營まるゝとてあります、

十二、因緣血脈のと

授戒には入戒せず、此戒師樣に、因緣だけ結ておかせたいと思ふ人は、因緣血脈の係の處へ其とを申出てになると、翌日には、戒師樣が御說戒の前に、親から、其申込まれた方に血脈を御授けになります、之を受ける作法も疎にはなりませぬ、

第二、日々の行事

一般の心得はまづ、此までとして、之より、七日間の日々の行持のお話を致します、

初日

一、啓建

授戒會が始まる日の前日か又は、其當日に戒師様が御到着になり、其お出迎には、組寺法類、檀中等の者が多數門まで出ます、さて戒師様が御着になると、本堂に於て到着問答と云ふのをする例もありますが、併し、大抵此頃では、前日にお着になりますから、初日の朝、啓建と云うて、愈々授戒會の始まると云ふ式があります、啓建とは、啓き建てるで、即ち授戒會の始まる印であります、其儀式は、戒師、教授師、引請師の三導師が御上殿になり、迎聖と云うて、授戒會の本尊をお迎へ申す式があり、それから、勅佛會と云ふ法要を行ふのであります、勅佛會と云ふのは、佛様方の德を諸勅と讃め上る法要のとて、宗門の中でも、重大な儀式の中に入つて居ります、其勅佛會の中に、僧侶方が立つては拜し、立つては拜するとがありますから、其時には戒弟一同兩側に居つて、一處に禮拜するのであります、

二、禮佛

禮佛と申しまして、佛様に禮拜するのは、授戒會中の重大な責務であります、即ち佛様の御説法の中に、凡そ此の世間の者が、尊ぶべき佛様が三千佛も居らせらせる、素より、佛の數は僅か三千や五千ではないが、まづ一寸言うてみても、三千佛はあるとのとて、授戒の戒弟は、其三千佛に對してお拜をするのである、即ち現世の千佛、未來の千佛、過去の千佛と云ふので三千佛名は、また三世の諸佛と云ふにもなる、其お拜をする時に、一々佛様のお名を戒弟一同で暗記えてゐるわけに行かぬから、御一同は、何の佛様に拜する時

ても、〳〵

南無三世諸佛

と唱へるのである、南無三世諸佛とは、三世の諸佛方を敬ひ上ると云ふとでありますから、一言で、何の佛様にも通用するとであります、之を授戒會七日間に丁度三千拜だけするのが、戒弟の責務であるから、其積りで、之を怠らぬやうにせられたいものである、中にはあまり大きな聲で、之を唱へて却つて一同の邪魔になるともありますから、總て中音でお唱へなさい、

三、供養のお經

前にありました、供養の主があつて、一同にお膳を供養する時には、其施主方の志す亡靈に對して御飯の前にお經を讀みます、其前に、朝粥とは本尊上供と云つて、出來た御飯を本尊様に上げて短いお經を上げ、引續き戒師様の御燒香で、供養のお經があります、それから其お經が濟むと、御飯になりますから、茶碗だの箸だのの用意をしてお待ちになるが宜しい、

四、飯臺

我宗では、御飯のとを飯臺と申します、俗に云ふお膳のとを、宗門では飯臺と申しますので、御膳を食べるとを、飯臺につく」と申します、直壇さんから、其の報知があつたら、列を揃へて、坐ります、僧侶方がお給仕に出て、お膳か、飯臺を列べますから、お茶椀やお椀を持つたお方は手早くお列べなさい、左様せぬと、お椀や茶碗のないものと思つて、二重に持つて來られますと、餘計な手數にな

ります、其れより飯臺のお經が上りますから、此書の始めにあつた處をよく見てお讀みになるが宜しい、讀めぬ方は、手を合せて居らるゝのであります、

何故飯臺でお經を讀むかと云ふと、一つには佛樣方のお名を申して、其方々にお禮の心を示し、次には、此御飯を斯く安樂に食べらるゝ身の難有さを思ひ、次には、此の功德を少しでも廣い世界の上にも下にも供養して、此御飯を食べただけの利益を空には費すまいと誓ふので、中々貴さお經てあります、戒弟も其積りでゐれば、御飯も美しく食べらるゝとてありませう、

五、生飯

「生飯をお取んなさい」と僧侶方が言はれたらば、拇指と藥指とで、御飯を七粒位取り、其れを膳の前の方へおきます、生飯とは、ツマリ餓鬼に施す心で取るものであります、後て給仕の方が取りに來られますまで、其儘にしておおきなさい、

六、茶碗等の始末

自身で茶椀等を持つて來られた方は、直に仕舞やうに、呑んだお湯の餘りで奇麗に茶碗とお椀とを洗ひ、其洗ひ流しの水は、給仕の方が桶を持て取りに來られた時に注けて茶碗やお椀をよく拭るゝが宜い、此水は、幾分か御飯の味がありますから、之を餓鬼に施すので、僧侶方は、お經を讀みながら注けるのであります、戒弟の方も、能きる方は讀が宜しいです

七、說戒

飯臺の御飯も濟んだ處で、維那の方がお經を讀まれますから、其時お經の濟むのを待つて徐に立たれるのであります、其次には說戒と云つて、戒師樣が戒法のお話をなされて下さいます、戒法とは、前にもある通り、三歸戒、三聚淨戒、十重禁戒の三通り合せて十六條の戒法がある、其れを七日間の內に、戒師樣がお說き下さるのてありますから、之が解らぬ者は、戒弟となつた所詮がありませぬ故、是非とも謹んで委しくお聞きなさい、其說戒の前に、二日目からは、因緣血脉を戒師樣から、お授けになります、此時に、前にある「我昔所造諸惡業」の懺悔文及び三歸戒をお唱へになりますから、戒弟は一々戒師樣の戒尺の聲を聞いて、直にお唱へなさい、(戒尺とは小さい拍子木のこと)

八、禮佛施餓鬼等

說戒が濟むと、また三世諸佛のお拜となります、何しろ、種々のお經や說敎の間を見計らつて七日間に三千佛の禮拜をするのてあるから、一日に四百拜位する覺悟で居なければなりませぬ、また其間に、施餓鬼とか晩の供養のお經とか其他の法要があります

九、藥石

藥石とは晩の御飯の事で、佛法では、昔は朝と晝の外御飯を食べず、晩には藥石と云つて、石を溫め、其を身体にあてゝ、養生の爲に用ひたもので、今でも夕飯を食べぬ僧侶は日本にも居られます、併し日本の風ては、兎ても二食で濟まされぬから三度食べるには食べるとになつたけれども、夕飯は儀式がないから、昔の名によつて、今でも藥石と云ふのてあります、其藥石は、お經が少し違ひます、即ち般若心經を讀みますから、讀める人は一

處に讀むが宜しい、又生飯を取らんても宜しいのです、加之、後のお經がありませぬ其他のことは、凡て晝の飯臺と同じであります、

十　壇上禮、佛祖禮

藥石が濟むと、暫くすると、壇上禮が始まる、壇上禮とは此授戒會と云ふものをお始めになつた佛樣方のお名を唱へては禮拜するので、本堂の正面の掛軸にあるのが、壇上禮の御本尊であります、其壇上禮の始めに唱ふる文は、左の通りである

一者　禮敬諸佛　二者　稱讃如來
三者　廣修供養　四者　常隨佛學
五者　懺悔業障　六者　恆順衆生
七者　諸佛住世　八者　請轉法輪
九者　隨喜功德　十者　普皆回向

其より左のお方々のお名を唱へてお拜をするのである、

立戒師釋迦牟尼如來
羯磨闍黎文殊大菩薩
三國傳戒祖師大菩薩
現戒師何某大和尚
引請師何某出和尚

敎授師闍黎彌勒大菩薩
證戒尊師十方三世諸佛
戒源師何某大和尚
現敎授何某大和尚

此他は戒師樣の家風によつて異ふ所あり故に畧す、

此の壇上禮は毎晩ありますので、（戒師樣によつては、午前に行はるゝもあります）戒弟は、南無三世諸佛を唱へて禮拜するのである

又壇上禮の次に佛祖禮がある、佛祖禮と云ふのは過去七佛より印度支那日本の、戒師樣まで代々傳へられ方々のお名前を唱へて禮拜するのであります、

十一　說敎、開枕

壇上禮、佛祖禮が濟むと、大抵夜間の說敎があります、其が濟むと、開枕と云ふ報告がある、鈴を靜かに振つて來るのは開枕の報知である、開枕とは枕を開くと云ふとで、即ち寢るとである、戒弟の方は、徐かに臥具係から夜具蒲團を受取つて寢まるゝが宜しい、若し自身持つて來ぬ人は、早くから其事を申し出ておくが肝要であります、

十二、夜座

戒弟の方を寢ませておいて、僧侶方の方では夜座と云うて、坐禪が始まるのである、本堂の周圍に幕を張り、其中で、坐禪をなし、高祖樣の『坐禪儀』と云ふお經を讀まれます、晝の疲れに、眠る人があつては、當人の修行にならぬから、警策と云ふ棒を持つた方が、始終廻つて、眠る者の肩を打つて歩きますと、打たれた方の僧侶は、難有うございました、お蔭で眼が醒めて、修行が出來ますと、手を合せて、お禮をするのである、禪宗のお寺の儀式の嚴なとは、斯う云ふ處にも現はれてをります、猶、戒師樣に依つては、戒弟の寢んだ後で、夜間懺佛とて、晝行ひました懺佛のお經を讀み、儀式を行ひ、又、曉天にも行はるともあります、本堂の方は、其通り、庫裡の方では、晝の仕事の跡片付に中々忙しいので、役々の方は、休む暇も實に少いのですから、戒弟の方は、世話を燒かせぬやうに、休まるゝが宜しい、

十三、點檢

戒弟が寢むと、點檢とて、四角な雪洞のやうなものを持ち、彼方此方と見廻はられますが、之は、火の用心や、戒弟方に粗相はない

かと直壇寮や其他の方が調べて歩かるゝのであるから、若し何ぞ氣の付いたことがあつたら、其方に告らせるやうにせられたいものです、

第二日

一、曉天の坐禪朝課諷經

翌朝になると、開枕の時とは異ひ、大層急はしく鈴が鳴つて來るから、其時戒弟は、起きて夜具を片付け、便用から洗面など濟ませ、本堂に行けば、最早本堂には、僧侶方が坐禪をして居られる、之は曉天の坐禪と云ふのである、其坐禪が濟んでから、朝課諷經として、毎朝何處のお寺でも讀むお經が勉まり、其次に大般若を擧げて御祈禱をするようもあります、尤も之は定まつては居りませぬ、

行持が終ると、大抵は、説教があり、其説教の濟む頃、夜が明けて明るくなる、其から朝の供養のお經、朝の飯臺となります、其は昨日のと異りはありあませぬ、此日から朝の供養のお經の後で、小參と云ふ問答の式がありますから、静かにお聞きなさい

二、順列

さて朝の飯臺が終むと、直壇の方がお話があり、一々帖面を持つて來て、調べたり、又はお名を呼だりして、戒弟の席順を定め、徐に本堂を出て、庫裡の方などを廻り、其間に戒弟の席順を悉皆定めて了ふのであります、此の順列が一度定まつた以上は、最早今までの樣に、自儘に列ぶとは出來ませぬ、飯臺にしろ、順列にしろ、必ず、其の處へ入らねばならぬのである、元來順列と云ふものは、お血脈を戒師樣から戴く時に、何百と云ふ戒弟のと故、一々名を聞いては探してゐる譯に往かぬから、順序を定めておいて、血脈を其通りに揃へ、順々に渡すやうにするので、其の爲めに、充分整理へておくのであるから、實に大切なものである、若し一人の人が順列を違へると、戒弟殘らずが他人の血脈を頂くやうなことが起り、實に大變なことになるから、順列が定まつた以上、必ず、前後の人の顔を覺えて、其席に着くようにしなければなりませぬ、

順列に率かれて、諸堂を歩きます中は、南無阿彌陀佛にしろ、南無歸依佛にしろ、唱へるが宜しい、

三、相見の拜

順列が濟んで、一同本堂に歸ると、戒師樣始め、教授、引請の兩師がお出てになり、戒弟の名代として、比丘即ち僧侶の戒弟がお拜をする、一同も其儘三拜する、之が相見の拜と云うて、三師方にお眼にかゝると云ふお拜であります、之は初日にする筈でありますが、顔が揃はぬから、二日目に行ふのであります、相見の拜の後には禮佛、供養のお經、畫の飯臺、説戒、藥石、壇上禮佛祖禮等總て初日の通りである、

第三日

此日も、第二日と同じであるが、唯だ明日は中日で、戒金を納める日であるから、其用意をしておくが宜しい、

第四日（中日）

戒金容納

此日は中日で、此日が終むと、翌日は、最早懺悔の夜であるから、帳面の整理をつけかたゝ、戒弟中の戒金を受取るのである、之は直壇の方の用事でありますが、元來、之は紙に包んでお布施のやうに納むべきであるのを、多い中ではあり、間違ひのないとも限らぬ處から、順列の時に戒弟の方から納めて貰ふのである、其他のとは、大抵昨日と異りませぬが、何か追弔會とか、開山忌とかを目的にした戒會であると、中日の豈に、大法要が行はれます、中には此日に大施餓鬼を行ふともありますから、其樣云ふ時には精々御參詣なさるがよい、また戒弟とはなれないが、參詣だけ仕樣と云ふ方も、此日に參詣なさるが宜しい、

第五日

一、懺悔

第五日は、愈〻懺悔の晩である、夕の飯盛が濟みますと、徐ろ仕度をして、順列に引かれ、次第に往きますと、敎授師樣が札をお渡しになるともあります）戒師樣の前に出る、其處で、戒師樣に「小罪無量」又は「障罪無量」と云ふ語を述べて、順列に從ひ、本堂に歸ります、之を懺悔と申します、障罪無量と云ふは、私共は、修行の障となる罪が澤山ございますと云ふのであつて、戒師樣にお詫びをするとであります、之には、大罪を犯した者は戒會に入れぬ、今は小さい、目に見えぬ罪を懺悔するのぢやから、小罪無量と云ふのが眞實であるとの說もあり

ますが、何れても宜しい、又敎授師樣から渡された札を戒師樣に差出して懺悔をする式もあります

二、捨身

懺悔が終んで、本堂に來ると、戒師樣がお出になり、御垂誡があつて、先刻戒弟の方が、障罪無量と唱へた時一々お調べになつた戒弟一同の名前の書いてある帳面を、本尊樣の前で燒き却て、戒弟一同の罪は戒師が引受け、殘ず、此處で燒いて了ふと云ふ儀式がある、其より、戒弟が佛樣に對し、昔から試しのある身の供養として、身を燒いて佛に供養すると云ふ故事に倣ひ、頭の上に香を焚いたのであるが、今は時勢も進んで、其儀式は已め、今日では、戒弟に燒香さするなり、線香をもたせるなりして、其邊りを戒師樣が「南無大悲觀世音」と唱へながら廻らるゝことになつてをります、之は帳面の名を、自身の身のあらゆる罪を燒き盡すと云ふ意味であると思つて、心を籠めて、此式に列ならなければなりませぬ、

猶ほ云うておきますが、此の懺悔の時に自身で懺悔をせぬ者は、翌日の登壇に、外の戒弟同樣、壇の上に上ることが出來ぬのであるから、何を措いても、是非來らるゝものであります、

第六日

一、致語

六日目の朝には、致語といふ式がある、之は、戒師樣や敎授師引請師の三師に向つて、何卒佛戒を授けて下され、敎授師となつて下

されと頼む式て、戒弟中から、比丘て一人、比丘尼て一人、優婆塞て一人、優婆夷て一人、四人の者が戒頭となつて燒香し、比丘の戒頭が三師へお願ひの語を述べ、一同三拜して、斯れて致語の式は終るのてある、

二、滿散歎佛、滿散施餓鬼

最早、第七日目には施餓鬼も、歎佛もありませぬから、第六日目の内に、終の歎佛と、終の施餓鬼とを行ふのてあります、即ち午前に滿散歎佛、午後に滿散施餓鬼、また說戒も今日が終てあるから、戒師樣の御說戒は之がお別れと思はねばなりませぬ、

三、敎授戒文

藥石が濟むと、徐々仕度をする、衣物は可成引摺ぬやうに着る、戒弟中には白無垢を着る人もあり、白の帶を占める人もある、それは御自由てあるが、之に限ると云ふてはないから、垢の付かぬ衣物を着て、上に白い袈裟を着るも宜しい、仕度が出來て、自分の席に着くと其れから直壇の方に迎れられて、敎授師樣の前に行き、十六條戒を受けて、此時にも、「よく持つ」と答へ、之て敎授師樣から、之から、愈々戒師樣の前へ出るのてある、此時に戒法を敎へられたのてあるから、之を見道場と云ふ、見道場が濟むと、戒師樣は本尊樣の壇、即ち須彌壇の上に登られる、敎授師樣が御案內下されて、本堂中を歩かせます、戒師樣の前へ出るのてある、此時に戒法を敎へられたのてあるから、之から、愈々戒師樣の後を戒弟に拜ませる式をすると、戒師樣の後を戒弟に拜ませる式をすると、直壇の方のもありますから、よく氣を注けて、直壇の方の話を聞き順道を誤まらぬやうなさるがよい

四、見道場、灌頂

敎授道場を出て、本堂に入りますと、戒師樣が御案內下されて、本堂中を歩かせます、之を見道場と云ふ、見道場が濟むと、戒師樣は本尊樣の壇、即ち須彌壇の上に登られる、

其時戒弟一同が、座に着いて九拜し、また直壇の方に連れられて戒師樣の前を通る、其の時少し頭を下げると、戒師樣が灌頂水とて、頭の上に水を掛けて下さる、それより、また座に歸ると、戒師樣が十六條戒をお唱へになり、「能く持つや否や」と仰やるから、其聲に從つて、一々「よく持つ」とお答へをなさい、

五、登壇、

右の式が終んてから、戒師樣が壇をお下りになると、此次が、愈々戒弟一同を諸佛の位に入らしめると云ふ登壇とて、重大な式てある、即ち直壇の差圖により、戒弟の者を、比丘、比丘尼、優婆塞優婆夷と順々に須彌壇に登らせて、其周圍を戒師樣始め敎授引請の二師が、お廻りになり、戒弟の前に來られて、御拜をなさる、即ち、戒弟も、佛の戒を受ければ、佛の位の入つたのてあるからとて、戒師樣が、戒弟の人等を禮拜するので、皆に難有い式てあります、戒師樣の其時唱へらるゝお語は「衆生佛戒を受くれば、即ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし已る、眞に是れ諸佛の子なり」とある、戒弟の人は壇上に於て掌を合はせて居らるゝのてす、

此登壇は多數の人を一々須彌壇の上に登らせるとゆゑ、役々の方の骨折は大層なとてあるから、戒弟の人は、よく云ふとを聞いて、騷がず、慌てぬやうにせられたいものてす、

六、血脉授與

登壇が終むと、戒弟は列を崩さぬやうに元の座につき、三拜をします、戒師樣は之から佛樣より戒師樣までの代々の系圖を書いた血脉と云ふものを、戒弟に授けられて、戒法を

受けた證となされます、世間で申せば、免狀のやうなものである、之は大切なもの故に、徒らに明けて見てはいけませぬから、明けて見ぬでもよい樣にと、戒師樣が、壇の上で、戒弟の方に一應御見せになりますから、お受けになつたら、モウ、徒に明けぬ方が宜しい、さて戒弟は又順々に戒師樣の前に參ますと、一々お手づから血脈をお授けになりますから其を受けて、又元の坐に戻り、御禮の拜を致します、之にて授戒の式は大躰終つたのですから、戒師樣はお退きになり後で敎授師樣が血脈のことをお說き下さいますから、よくそれをお聞きになるが宜しい、其の御話が濟みますと、壇上禮があるともあります、

登壇の式は三更登壇と申しまして、草木も睡る十二時頃に行ふべき式で、自然、夜の更けるとを豫め御承知なさい、又、此登壇も前の夜の懺悔も、餘人に知らせず、見せぬやうに、二重にも三重にも幕を張つて、鄭重に式を行ふとゆゑ、始めは涼しくても、次第に暑くなりますから、あまり厚着をせられぬ方が宜しいと思ひます

又、其夜お受けになつた血脈の表に戒名が書いてあります、始めて授戒に入戒たお方は其が自分の戒名であると思うて、記憶えて居らるゝは勿論、血脈は可成佛壇とかお守入のやうな處へお置きになつて、遺失さぬやうにせらるゝが宜しい、

第七日

一、謝拜

懺悔も終み、登壇も終み、第七日目には戒師樣も愈々御出立になりますと故、戒弟の方は精々早く仕度をして、說敎も聞き、お經も伺ひ其後で、謝拜があります、之は二日目の相見の拜と同じとて、戒頭が謝拜をします、一同は之に伴れてお拜をするのである、まづこれで戒師樣始め敎授師樣引請師樣にお禮の式と暇乞の式とが濟ましたから、是より當日の重大なる儀式、上堂と云ふことが始まります

二、上堂

謝拜がすみ、送聖と云うて、本尊樣を御送りする式も終りますと、完戒上堂が始まる、上堂とは、戒師樣が、須彌壇の上に登られて、僧侶方の問答をお受になりますので、最初に壇に登らるゝと、種々の唱へ物をせられて香を熱れ、それより警策と云ふ棒を持つてお立ちになると、幾十人の僧侶方が出て問答をしかけられます、問答とは、佛法の道理について、戒師樣へ御質問ぬすると、戒師樣がお答べになるので、毎朝ある小參の更に嚴しいものである、此時敎授師樣が大抵白槌師と云ふ役即ち壇の側にある槌をついて、式の始めと終りとを明かにせられます、

三、開靜門送

上堂が終り、戒師樣は壇を下られると、一揖して、直にお出掛けになります、其時には戒師樣の、御都合にもよりますが、開靜と云ふことをして、其響きの中に戒師樣はお歸りになります、戒弟其他は門までお見送りをしてお別れを告げ、それから仕度をして、歸らるのであります、

四、歸宅

荷物を片付け、酒盃を仕舞ひ、慌てぬや

うに、人を頼むなり、車を備ふなりして歸らるゝが宜しい、さて歸宅して見れば、一週間も不在の爲に家の中に用事が滯ふつてをりませうが、其樣云ふ時には、徒に腹を立てず、戒師樣からの敎を深く身にしめて、斯う云ふ時が戒師樣の御語を心に銘す時ぢやと、忍耐をして、七日間の修行を、一時で失して了はぬやう心掛けが肝要であります、

第二　結言

以上は、私が戒弟の心得となるのであらうと思ふ所を少しばかり述べたもので、戒弟の心得は、一々直壇の方から、お話しがありますから、其を熟くお聞きになつて、種々の儀式に間違のないやうになさいませ、其他此本にあるとても、戒師樣の御家風により、多少の異はありませうから、其邊は凡て其授戒會の規則に從がつて、お勤めなさいませ、

南無大恩敎主釋迦牟尼佛、高祖承陽大師
太祖弘德圓明國師　生々世々値遇頂戴供養恭敬

明治三十八年十月九日印刷
明治三十八年十月十日發行

不許複製

編輯人　來馬琢道
東京淺草新谷町十番地
發行人　今村金次郎
東京芝琴月町十八番地

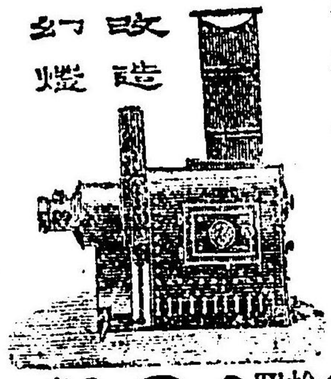
印刷人　太田音次郎

發行所　鴻盟社

大勉强印刷鮮明
御名刺廣告類外一切印刷所
各宗御寺院御用

東京市下谷區入谷町（元合羽橋通り）
大久保活版所
（電話下谷一二六三番）

曹洞宗映畫
承陽大師御一代記
圓明國師御一代記
永平寺眞景等



弊舗は數年前文化年間より斯業に從事し多年の經驗實歷に富み品位の精良と着實信用を固守して發賣す遠隔の地方に在て購求せらるゝ共定價表面と毫も異なる無きは勿論品位又精巧を選み價格も十分低廉を以て販賣す

●最新活動寫眞器械金三拾五圓以上●白光瓦斯幻燈器械一式付金五拾圓●甲金三拾五圓金三拾圓●乙金貳拾七圓●丙金廿四圓●丁金廿圓●戊金拾八圓●巳金拾四圓●庚金拾壹圓各種●二號形甲金拾壹圓●乙金六圓半●丙金貳圓拾錢●番外四圓

●日露戰爭第十四回樺太占領まで　佛敎衛生黑死病畫赤痢病畫

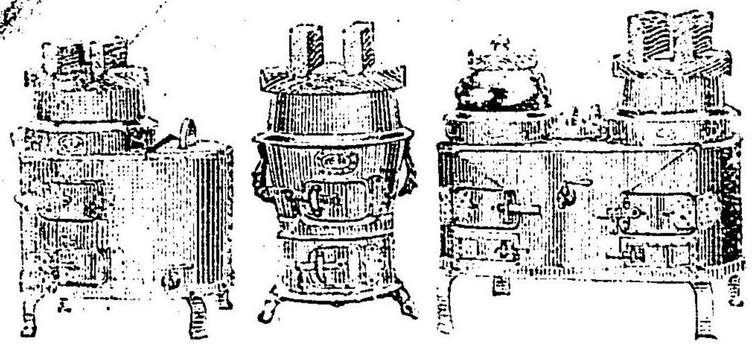
●敎育●勸業●農業●蠶業●肖像●各國名所●運轉畫數千種●明細表御入用は往復端書●器械映畫は小包郵便にて發送す

東京市淺草區藏前片町（東京電燈會社前）
電話下谷五九〇番
電信　暑號トラク　四世　池田都樂

佛敎各宗高僧傳記肖像景色一切あり

特許 新炭兩用

富貴竈



商品目錄御一報次第進呈

營業品目

室内煖爐各種
鐵瓶湯沸類
アルミニューム製器具
洋食器具一式
富貴竈

阿部彦四郎商店
東京市淺草區茅町淺草橋際（特電話下谷一九二三番）

精進御料理
仕出し一切
祝儀不祝儀

各宗御寺院用

電話にて御申越あれば直に參上精々廉價に御相談申上候

東京淺草區馬道町八丁目
（俗にやぶ）
森田屋榮藏
（電話下谷一五〇九番）

曹洞宗大本山御用
淨土宗大本山御用

御法衣一切

東京市芝區片門前町一丁目
（大門前通り）
太田長右衛門
（電話新谷三七七三番）

●打敷●水引其他佛具何にても御注文に應じ候

東京
將棋社